

南 六郎（みなみ・ろくろう）

1、プロフィール

詩人。青森県詩人連盟副会長。代表を務めた詩誌「弘前詩人」を中心に、昭和40年代から50年代にかけて多くの作品を発表。誠実な人柄と詩に対する真摯な姿勢は、多くの詩人達に敬愛された。

<生没>

1909(明治 42)年～1985(昭和 60)年9月5日

<代表作>

『風倒木』『時の変奏』『黒の季節』『遠い旅の道』『偏東風』

<青森との関わり>

生まれは仙台市。戦前を東京で過ごす。終戦直後、妻の実家のある弘前市に移る。飲食店経営の傍ら、精力的に詩作をし、後進に大きな影響を与えた。

2、作家解説

詩人。本名・古川一郎。明治42年、仙台市に生まれる。

終戦直後、妻の実家のある弘前市に移り、飲食店を経営。戦前は、新聞記者をはじめ様々な職業に就いたが、自筆略歴には、「東京放浪二十年」とのみ記している。当時から多くの詩人と交流があったということであるが、詩友たちにも自分の過去についてはほとんど語らなかった。中野重治等の戦前の詩誌「驢馬」に関係していたという伝説も、事実については確認できなかった。またその頃、詩人西一和と交流があったということも、本人に確認した結果、事実ではない。しかし、それは南六郎が戦後の青森県詩壇に与えた影響とその実績を少しも損なうものではない。むしろ、その圧倒的な実力と強烈な個性に影響を受けた周りの詩人達が、自然と創り上げた伝説であったと考えるべきだろう。

詩誌「朔」、「青宗」、「告天子」同人。詩誌「弘前詩人」代表。青森県詩人連盟副会長を務める。

「今日ほど良心の求められている時代はない。言い変えるならば人間らしい心ということである。私はこの姿勢で詩作をしてきたつもりである」(『時の変奏』)という言葉にも示されるように、誠実な人柄と詩に対する真摯な姿勢は、多くの詩人達に敬愛された。五冊の詩集、『風倒木』(昭和 42)、『時の変奏』(45)、『黒の季節』(48)、『遠い旅の道』(51)、『偏東風』(57)を刊行。また、代表を務めた「弘前詩人」は茂田篤、山形光弘、山村秀雄、蘭繁之等の重鎮をはじめ、一時的でも同人であった詩人は 60 名を下らない。

昭和 40 年代から 60 年代にかけて、県詩壇の一翼を担った。

昭和 60 年 9 月 5 日、弘前市の自宅で倒れ、脳血栓のため急逝。享年 76 歳。

3、資料紹介

○『偏東風』

図書

1982(昭和 57)年 4 月 30 日

220mm × 155mm

最晩年の詩集。後書に「わたしの感動は旅である。(中略)それもだんだん終りに近づいてきた。旅が終れば、わたしの詩生活も終りを告げるであろう」と記しているが、諦観と旅への憧れが時代を見つめる厳しい眼差しと絡み合う。作者の詩精神の到達点を示している。